

黒人女囚の叫び、「娘たちの時代には虐待がなくなるように」

ジャスティン・ヴァン・デア・リューン 脇浜義明訳

出典：Dissent, 2020年6月20日

コロナ・パンデミックと黒人差別に抗議するデモが世界に広まっている中、テキサス州の刑務所の独房で黒人女性クワネータ・ヤートリス・ハリスが冷え切ったボローニャ・サンドウィッチを食べていた。これは良いときの食事で、悪いときは懲罰食と言われる栄養補給パンである。ひき肉、ジャガイモ、マーガリン、シロップ、卵、雑多な野菜を混ぜ合わせて焼いたパンである。

食事は窓のない独房の扉から差し込まれる。ハリスはこの独房に2015年以降ずっと閉じ込められている。いずれは雑居房へ戻されて刑期を終えることになるだろうが、刑期が終わるのは2058年で、そのときハリスは86歳になっている。他の囚人と同じように、ハリスも看守から怪しげな懲罰をよく受ける。最近では、ジャーナリストの私が偽名を使って彼女に電話をするのを「幫助した」という規律違反で懲罰を受けた。彼女はそんなことをしなかったのであるが、懲罰はまだ続いている。懲罰にはいろいろある。栄養補給パンもその一つ。独房延長もその一つ。

ハリスら女性刑務所囚人たちは看守から酷い仕打ちを受けている。私が初めてハリスに手紙を出したのは2019年3月、背景調査を行っている頃だった。以来ずっと彼女と文通をしている。彼女は、女囚たちが男性看守の視線の中で眠り、トイレ、着換え、シャワーをしなければならないことを書いてよこした。「昔黒人女の肉体は奴隷主の遊び道具でしたが、今は白人看守の遊び道具です」「女囚への暴力は許容されているどころではなく、日常茶飯事なのです」「少年院から送られてきたばかりの少女が6人の看守から暴行されるのや、女囚がコンクリート床に何度も激しく投げつけられるのを見ました」と彼女は書いた。

刑務所には電話が備わっているが、会話はすべて聞かれている。もちろん市街でのようにインターネット、ソーシャルメディア、ビデオ撮影などが使えないので、刑務所内の国家暴力は見えない。ハリスは「看守にボディ・カメラを装着させればよいのに」と書いた。「この恐怖を世間が知れば…刑務所はこんなにいっぱいにならないでしょう。」

現在23万人以上の女性が服役し、それぞれ独特の物語があるが、彼女たちの背景には共通するものがある。諸調査によれば、連邦刑務所収監の女性の60%には性的または身体的虐待を受けた過去があり、州刑務所収監の女性の94%にも入獄前に性的・身体的虐待を受けている。女性のための人権プロジェクトの2015年報告でも、未成年刑務所に収監されている少女の大多数が収監前に性的・身体的虐待を経験したことが記されている。それも、かなり激しい虐待を繰り返し受けている。

虐待のトラウマの個人史 — 検事も裁判官も陪審員も被告の弁護士もたいてい無視して取り上げようとしないが — はジェンダーに基づく犯罪では大きな役割を果たしている。ハリスは元空軍兵士のボーイフレンドを射殺して金を盗んだ罪で有罪となった。その経緯をわいせつなTVドキュドrama・シリーズが取り上げたが、彼女は参加を拒否した。そのド

コメントのインタビューの中で、白人男性裁判官が「ハリスの犯罪は私が知っている犯罪の中でも最邪悪なものだ」と語っている。彼女の弁護士の白人男性も困惑した表情で、「何故こんな犯罪を犯したのか、私は理解できない。生い立ちも悪くないし、良き母親だったのに」と語っている。ハリスは私立の学校に通い、彼女の母親も市民として非のない人物だった。しかし、ハリスは子どものときに性的イタズラをされ、12歳のときには誘拐・輪姦された。結婚歴は2回、どちらの場合も夫から身体的暴力を受けた。

「弁護士さんは私が受けた性的虐待、特に私が殺したボーイフレンドから受けた性的虐待に関心を示しませんでした」と、彼女は私への手紙に書いている。ボーイフレンドとの別れたりくっついたりした関係の中で、ボーイフレンドは彼女に暴力を振るい、彼女を性的道具のように利用した。性的行為を強引にビデオに撮り、それで彼女を脅迫した。彼女のコンピューターにスパイウェアで侵入したり、彼女が正看護師として勤務している病院の同僚たちに彼女を「浮気女」「売春婦」「盗人」と罵倒するEメールを送った。しかし、彼女の弁護士団はボーイフレンドの歴戦の兵士像を汚すのは得策でないと考え、また12歳のときに誘拐・輪姦された事件（彼女は当時犯人たちへの告訴をしなかった）はハリスを「嘘つきで性的にだらしない女に見せる」として、取り上げなかった。ハリスもそれに触れることを望まなかった。「自分をいつも性的虐待を甘受する人間に見せる恥辱の方が殺人犯を恥じる思いより強かったからです」と、彼女は私への手紙で書いていた。

刑務所で彼女は自分と同じような境遇の女性をたくさん見た。新しく入所してきた女性は体中に虐待の傷跡があった。夜中に夫の暴行の夢を見て悲鳴を上げて他の囚人の目を覚まさせる女性もいた。子どものときに人身売買され、鶏小屋で寝ていた女もいた。白人女性がレイプや虐待経験を語ると「嘘つき」呼ばわりされるだけだが、黒人女がレイプや虐待経験を話すともっとひどい言葉で人格否定される。実際に夫やパートナーによる性的虐待や身体的暴力を受けるのは黒人女性の方が圧倒的に多いのだ。

入所後6年後の2015年、ハリスは刑期を縮めようとして裁判官の署名を偽造した書類を作ったとして罰せられた。彼女は他の囚人 — 多分「アーリアン・ギャング」<sup>1</sup> — の仕業だと証拠を上げて反論した。しかし、審理までは隔離するとして、もう1600日間独房生活を強いられてきた。その間にコロナ・ウィルスがテキサス州の103か所の刑務所にも広まった。7821人の囚人が陽性と診断され、少なくとも79人が死亡した。刑務所職員も1321人が感染し、8人が死亡した。

刑務所内の感染増大に対して、2人の囚人がテキサス州刑務所のウィルス対策を求める要望書を出した。ソーシャル・ディスタンスを保つことが不可能で、消毒液もない状態を訴えた。5月14日、最高裁は訴えを却下した。同日にテキサス刑事司法部（TDCJ）は囚人が手縫いでマスクを作る作業を行っているビデオをアップデートした。マスクをつけないで作業している姿だ。いつもの国旗を縫う作業でなく、マスク製造に貢献していると「気分が高揚する」という一人の女囚の発言も入っていた。刑務所内労働は強制的で無償

---

<sup>1</sup> 刑務所内の本拠地として外との協力で活動するギャング団。

で、刑務所外の道路工事などの作業も武装騎馬看守に見張られているが、TDCJはマスク製造作業は決して奴隷労働や鎖に繋いだ囚人労働の類のものではないと説明していた。

ハリスは独房に隔離されていたのでマスク製造作業に従事していなかった。テキサス州は独房隔離を「制限的居住」とか「行政的隔離」などと呼んでいる。2017年後半、テキサス州政府は懲罰としての独房隔離を廃止すると発表した。しかし、人権団体テキサス公民権プロジェクトの2019年報告によれば、この廃止改革で実際に影響を受けたのは僅か75人の囚人だけであった。国連は、独房隔離は更生目的に沿わず、拷問の一種だと規定し、僅か10日間の隔離でも精神健康を破壊すると言っている。コロナ禍のロックダウンを経験した人々はこのことを分かったはずである。数百万人の人々が何日間も自宅に閉じ籠って地域社会から隔離される中で、精神的ストレスとフラストレーションをつのらせた。人との接触を求めて身体的に痛む感覚を覚えた人も多くいた。

しかし、独房隔離はコロナ禍のステイ・ホームと全然異なる。キルトもないし、陽の光もない。冷蔵庫もティシュペーパーもないし、パソコンも使えない。ちょっと外へ出て付近を散歩したり、ソーシャル・ディスタンスを保って歩道で飲食をすることもできない。数か月から数年独房へ閉じ込められた人の話では、長期の孤独は感覚を異常に鋭敏するという。看守の香水を嗅ぎ分けることもできるし、遠くの足音でどの看守かが分かるという。独房囚の中には膝で床を掃除して膝にたこができる人もいる。何かをしないではいられないのだ。カルフォルニアの刑務所の女囚は独房の中でコオロギを飼った — コオロギの脚を折って逃げないようにして。ミネソタ州の刑務所の男囚は独房で赤ちゃんネズミといっしょに暮した。ネズミを瓶の中に入れて枕元に置いて、添い寝したという。

懲罰としての独房隔離を廃止したはずのテキサス州で、現在独房生活をしている囚人は4000人を超える。平均5年間の独房生活で、最長20年の長きにわたる人もいる。これに費やす費用は年間4600万ドル。テキサス州を除く米国内の刑務所の独房監禁者数の合計よりも、テキサス州の刑務所で独房監禁されている囚人の数の方が多い。TDCJはハリスを独房監禁している理由を明らかにしない。

私がハリスと初めて接触したのは、女囚の実態に関して長期的取材をしようと多くの女囚に同一内容の手紙を送ったときであった。彼女は返信で、女囚の子育て問題を取り上げて欲しいと書いてきた。「鉄格子やレザーワイヤーで隔てられていても、母親の気持ちと役目はなくなりません。」女囚の80%が子持ちで、ハリスにも3人の子どもがいる。また、彼女は、世間が自分のような人間に抱いていると感ぜられるステレオタイプを是正して欲しいと書いていた。「検事たちは殺人罪で告訴される女性を邪悪で悪魔のような怪物だと告訴状の中で書きます。しかし、私はそんな『怪物』に出会ったことはありません。私が出会った殺人犯女性の多くは、精神疾患があるのにその診断も治療もされていない人々でした。」

私たちの文通は、いわば米国の刑務所に収監されている女性の人生と生活を覗き見るレンズの役割を果たした。女囚の数は、黒人が白人の2倍である — 一時停止違反で逮捕し

たり、最低量刑制度<sup>2</sup>を利用する人種差別的警察行為のために、黒人服役者が多くなる。ハリスがドクター・レーン・マリ刑務所<sup>3</sup>— 一般に「惨めなマリ」と呼ばれている — で経験しているのは「永久懲罰の一つ」だ、と彼女は書いている。彼女の手紙は、子どもと会えない精神的苦痛や、夏の独房生活の身体的圧迫感について書いている。夏の独房は温度が華氏100度を超え、拷問だという。特に閉経前の一過性熱感に悩む女性にとっては地獄の苦しみになる。テキサスの刑務所の75%にはエアコン設備がない。高価で設置できない、というのが当局の説明である。そのくせ、囚人の無償労働が作り出すモノやサービスを販売する営利会社テキサス矯正事業興産 (Texas Correctional Industries) は2018年に7670万ドルの販売利益を得ている。この20年間で高温度が原因で死亡したり原因不明の病気になった囚人は20人を超える。

しかし、それは公式発表の数字である。2019年10月のハリスの手紙には、少年刑務所から移送されてきた19歳の少女 — 彼女の長女と同年齢 — のことが書いてあった。少女はトラウマに起因する問題行動で独房隔離された。独房の暑さに耐えかねた少女は、エアコンがある精神医療センターへ移りたくて、見せ掛けの自殺を行った。その月だけでも同じようなことを行った女囚は4人いた。成功したのはこの少女だけ、つまり本当に死んだのである。「あの子は『死んだふり』をしたかっただけなのに」とハリス。

囚人たちの報告によれば、自殺または自然死とされたものも、実際には、看守の手荒い扱いや、医療不足や医療怠慢や、劣悪な居住条件に起因することが多い。現代では監視カメラがあちこちに設置されているので、街頭での死者発生の原因とかその責任の所在に関する警察発表の嘘がすぐ分かる。しかし、刑務所内では、当局発表の嘘を覆すことは困難である。最近ニューヨーク州の刑務所で2件の死亡事件があった。精神医学的危機状態にあったアフロ・ラテン系のトランスジェンダー女性のレイリーン・エクストラバカンザ・キュービレット＝ポランコが独房監禁中にてんかん合併症を起こしたが、放置されたまま死亡した事件と、黒人男性ジャメル・フロイドが独房内で看守たちから唐辛子スプレーを浴びせられ、心臓麻痺で死亡した事件である。2015年にはテキサス州の刑務所で、黒人男性マーク・サビーが、別に荒れた行動をしたわけではなく、ただ気分が悪くて、何度も「息が苦しい」と言っただけで、6人の看守が彼に飛びかかり、唐辛子スプレーを浴びせた。その後サビーは「仮病で呼吸困難を偽った」規律違反で「騒動を起こした」として、規律違反切符を切られた。それから手錠をかけられたまま独房へ放り込まれた。翌朝、彼が死んでいるのが発見された。

刑務所内で起きたことは外の世界からは見えない。虐待を訴える囚人は社会底辺層出身で、そういう社会的背景と外の支援者がいないためと、刑務所内の不透明さのために虐待の証拠を提示することができないので、世間は囚人の言うことを信用しないことが多い。ハリスが収監されているテキサスは看守の暴力が米国でもっとも多く、2009年~201

---

<sup>2</sup> 薬物違反など軽微事犯に一定期間の拘禁系を科す制度。

<sup>3</sup> TDCJ 管轄の女性刑務所。

9年の間に囚人数が比較的減少したにもかかわらず、看守暴力数は66%も増えた。

暴力以外にもっと隠微な抑圧もある。囚人の違反を記録して素行評価を決定する規律違反切符のノルマ化である。2018年全国調査によると、女囚は男囚よりも軽微な規律違反で切符を切られることが多い — 「不敬」とか「反抗的態度」とか「やたらと人をジロジロ見る」という訳の分からない違反で、要するに看守の主観や気分で決まる類の規律違反が女囚に適用されることが多いのだ。規律違反切符を切られると、刑期短縮の基礎となる素行良好点数が減じられる。カルフォルニアの刑務所の女囚は、この規律違反切符で、刑期が1483年間増加させられたという馬鹿げた事実も、調査で明らかになっている。

TDCJは、囚人素行評価を決定する規律違反切符をノルマ化していることを公式には認めない。しかし、『ヒューストン・クロニクル』は、テキサスの刑務所でノルマ化が行われている事実を報道している。ハリスは生まれつき巻き毛で、それに似あうヘアスタイルにしようとしたところ、看守から「過激な髪形」という規律違反になるぞとおどかされた。また、看守が彼女を背が低くて太っていると言うが、看守が思っているより背が高くほっそりしていると文通相手に書いたこと、また、胃腸炎を持病に持つ貧しい女性にセブン・アップを与えたことで、規律違反切符を切られた。

2015年に独房生活になってからハリスが受けた懲罰は軽微な違反によるものばかりである。しかし、詐欺罪となると、そうはいかない。彼女が待っている審判にも大きな影響を与える。普通ジャーナリストは規律違反切符発行でつち上げを知ることはできない。しかし、これから述べる詐欺罪でつち上げについては、私自身が関わったことだから、よく知っている。刑務所は説明責任を伴わず、監視システムもない隙間の中で好き放題しているのである。

3月16日、私が住んでいるニューヨーク市にロックダウンが敷かれたとき、郵便局が通常通り機能しなくなったので、もっと早い通信方法が望んで、私はセキュア・テクノロジー社のメッセージ通信システム(MS)を使って、ハリス宛に刑務所へEメールを送った。この会社は囚人やその家族に法外な料金を請求して、年間7億ドルの収益を稼ぐ民間会社である。私のEメールはプリントアウトされてハリスの独房に届けられた。Eメールには私の電話番号を書き、私に電話できないかと書いていた。それまで電話で直接会話する可能性について手紙の中で話し合ったことはなかった。ハリスは普通郵便で返事をよこした。彼女には携帯電話やEメールを使う便宜はないのだ。

3月29日、少し調べてみた結果、刑務所所定の囚人用電話を使えば、ハリスと直接会話ができることが分かった。それにはIDを登録して料金を払うことが必要だった。私の携帯電話は、米国の携帯電話利用者の70%と同じように、家族割引プランである。夫が電話料金の支払者である。だから、夫の了解を得て、彼に関する情報をアップデートして登録した。私は再び一方交通のEメールをハリス宛に刑務所へ送り、夫の名前を教え、「基本的に夫の電話番号になります」と書いた。4月中旬に3月16日付のハリスからの手紙を受け取った。その手紙では、刑務所の規定では独房隔離中の囚人が電話を使えるのは9

0日間で5分だけで、それも身近な家族との通話だけに限られる、と書いてあった。「だからあなたに電話できないのです。」さらに、「独房の人たちは外の人々が刑務所に独房の改善を促す電話を刑務所にしてくれることを望んでいます。3月11日以降独房の流し台のお湯が出ないので、それを治して欲しいのです」と書いてあった。

ハリスは、テレビ鑑賞が許されないので、ナショナル・パブリック・ラジオを聞いていた。ラジオが伝えるコロナ・パンデミックのニュースに怯えた。獄舎の清掃はめったにされず、独房を消毒する消毒液もなかった。シャワーのときは裸にされ、後ろ手に手錠をかけられて、獄舎の独房囚24人共同の三つのシャワーの一つへと連れて行かれ、両側から看守に腕を掴まれた状態で、シャワーをする。その看守たちの詰め所には手洗い場もないのを知ったハリスは、シャワー場に行くのをやめ、独房内の流し台で体を洗うことにした。ところがその流しの水道から出る水は1週間から氷のように冷たかった。多分他の独房も同じであったろう。彼女は、新任所長のカレン・ストロレーニが巡視してきたときに、そのことを訴えた。新所長は、「お湯を使わなければならないという規則はないのですよ」と静かに答えたという。

それがこの数か月間でハリスから得た唯一の手紙に書いてあることだった。その後、4月後半になって、それまで会ったことがないハリスの母親からメールがあった。そこにはハリスの母親宛の手紙と刑務所文書が書かれていた。母親への手紙には、「ねえ、母さん、大変なの！ジャーナリストのジャスティンに関することで所内裁判があったの。あたしは15か月間の行動制限懲罰になった。大きな懲罰記録を付け加えられたくないのに」とあり、刑務所文書は「違反者ハリス、クワネータ・ヤートリスは…個人情報の偽表示を禁ずる TSCJ 規則に違反した…違反者ハリスはジャスティン・ヴァン・デア・リューンを幫助して、刑務所内囚人用電話システムを使って不正な通話をしようとして、偽名で電話登録させた…」とあった。

私はストロレーニ所長室に電話した。応対した彼女の秘書に、私が自分の判断と意志で夫の名前で電話リストに登録したのであって、ハリスは関与していないことを説明した。2日後にも同じことを行ったが、何の効果もなかった。よくあることだが、親が収監中のわが子に良かれと思って何かをしようとしても、刑務所職員から無視され、冷たくあしらわれるだけである。ハリスの母親は心を痛めた。私が家を訪れたとき、彼女は「娘は懲罰としてあの栄養補給パンを食べさせられるかもしれない」と、孫であるハリスの娘たちに聞こえないように低い声で言った。「娘は、刑務所職員は誰も私のことを知らないのに、何故私を嫌うのだろう、と書いてきたので、私たちがお前のことを知っているし、お前を愛しているから安心をおし、と書いてやりました」と母親が言った。

5月6日、私はストロレーニ所長に、今度は有名実力者や著名記者の名前も添えて、Eメールを送った。事実経過を述べ、すべて私の責任でやったことだと説明、「ハリスと直接電話で会話しようとした私の試みで、ハリスはそれに関して何の役割も担っていない」と書いた。送信後30分も経たないうちに、刑務所広報部長ジェレミー・デセルから連絡があっ

た。ジャーナリストが刑務所が用意している囚人用電話番号を使うことは、ジャーナリストの資格でできません。ジャーナリストとして刑務施設の便宜を利用することは禁止されています」と部長は書いていたが、ハリスの件に関しては何も触れなかった。

その日の午後、ストロレーニ所長から電話があった。所長は、この件に関して証拠を集めて精査した結果懲罰は妥当だと判断、ハリスが「ジャーナリスト」に接触するために「第三者」を利用したことは明白である、と言った。最初のハリス告発にはジャーナリストとか第三者利用などの記述はなく、ただ私が偽の名前を使うことに関連する詐欺罪であった。私が抗議すると、「私はあなたのことを思って間接的に表現しているだけです」と所長は言って、電話を切った。

ハリスと私は、女性が性的・身体的暴力から身を守ろうとして犯罪者になってしまうことについて、何度も手紙で論じ合った。「これまでの人生で、トラウマになるような事件はみんな性的暴行から始まりました。妊娠から投獄になるのです。」彼女は、女囚には「棺桶か刑務所か」の選択を迫られた人が多い、と書いた。2019年12月にハリスに送った手紙の中で、私は昔の黒人奴隷のことを書いた。セラという名のミズーリ州の黒人奴隷女性で、14歳の彼女を買った白人主人から繰り返しレイプされた。1855年、何度も主人の娘たちにお父さんの性的暴行を止めてくれと懇願したが無駄だったので、とうとうある夜、小屋に入ってきた主人を妊娠で身重になっていたセラが攻撃した。白人男性だけで構成された裁判で殺人罪で有罪宣告を受け、死産児を産んだ後、絞首刑に処せられた。連邦刑務所内でコロナで最初に死亡した女囚がいたが、セラの場合とよく似ている。シャイアン・リバーのスー族の女性アンドリア・サークル・ベアは軽い薬物違反の罪で、テキサスの刑務所で妊娠の身で服役していたが、コロナに感染、酸素呼吸器に繋がれたまま帝王切開手術を受けて死んだ。

ハリスは返信の中で、セラの話と類似した話を書いた。彼女の曾祖父母はテネシー州の小作人奴隷だった。白人奴隷主はよく曾祖父を畑へ行行って働けと追い出して、曾祖父の妻をレイプした。そのため曾祖母は18人も子どもを産んだ。「赤ちゃんがピンク色だったら…赤ちゃんを始末しなければならなかった。そんな子を育てようとする和家人みんなが殺される」からだ。ハリスの祖母は白人と同じ肌色だったが、「運がよかった」とハリスは書いた。噂によれば、産婆が、赤ちゃんの皮膚の色と目が青いことに気付いたが、生かすことに決めたという。

ハリスの祖母は外見上白人女として通ったが、それでも女性として恐ろしい体験をした。遠方に安くて品質がよい品物を売っている白人専用の店があったが、白人で通る彼女はそこへ買い物に行かされた。その途中で白人の不良少年グループに襲われてレイプされたことがある。また、あるとき、彼女がボビーという8歳の黒人の子どもと話をしているのを見た白人少年たちが、黒人のくせに白人少女と会話をしていると思って、幼いボビーを捉え、木に吊るし、火をかけて、殺した。祖母はこのことで、96歳で死ぬまで一生自責の念で苦しんだ。「母さんから聞いたのですが、お婆ちゃんはアルツハイマーになったときも、

若い時受けたレイプやボビーが殺されたことを頭の中で追体験、それも何回も、していたそうです。」

ストロレーニ所長との電話会話の一週後、私はデセル広報部長に再度「クワネータ・ハリス事件」に関する質問をリスト化して送った。デセルは、ハリスやハリスの家族に大きなストレスを与えている懲罰をすっかり忘れていないか、気にもしてない様子だった。「あなたが何の話をしているのか、私には分かりません」と、私の留守電に彼の声が言った。「規則違反者は14万人もいます…あなたのおっしゃるクワネータ・ハリスの件がどんなものであったのか、詳しく教えてください、私には分かりません。」

私は再び詳しい経過をデセルにメールで送った。返事はなかった。7月23日、正式に記事に書くからと言って、彼に連絡した。彼の返事は、「事の性質上」私がハリスにインタビューすることは無理だが、一般に囚人と連絡をとることは禁止されていない、というものだった。彼が私に送ってくれた長たらくて曖昧な指針書みたいものには、「メディアの電話による囚人取材は禁止」と読み取れた。

6月25日オンラインで調べると。その指針は、メディアと囚人との電話による接触を禁止すると、はっきり書き直されていた。これが意味するのは、コロナ禍で面会禁止となった囚人は郵便によってしかメディアと接触できないということだ。しかもその郵便は厳重に監視・検閲されるのだ。

郵便サービスが回復して、ハリスからの手紙が前よりもよく届くようになった。彼女は、自分が違反懲罰を受けたのは自分が刑務所の実態を手紙に書いていることに関係があるかもしれないと思う、と書いた。つまり、自分の「日々の闘いの記録」への報復だと言うのである。彼女への懲罰には妥当な意味がない嫌がらせだと言った刑務職員も何人かいる、と彼女は書いていた。「外で警察が黒人にやっているやり方は刑務所や刑事司法全体に及んでいます…一人の警官がジョージ・フロイドを圧死させている時、3人の警官がそれを止めないで傍観していました。そういう関係が警察、裁判所、刑務所の間にあるのです。踊り手が異なっても音楽は同じなのです。」

5月の電話のとき、ストロレーニ所長は、ハリスが不服に思うのなら異議申し立てができる、と言った。所長が言うのは苦情処理委員会のことである。これは囚人と刑務行政の間の対立問題を処理する唯一の法的手段だが、「プリズン・ジャスティス・リーグ」の2017年報告はそれを「八百長」と呼んでいる。この委員会を運営しているのは TDJC である。国家監視団の2008年調査報告とプリズン・ジャスティス・リーグの2015年報告によれば、苦情処理委員会を利用した囚人の大多数は看守から報復処置を受け、満足な解決を得たのはほんの数人だけであった。ハリスは私たちの手紙と私が私自身の行動を説明した E メールを証拠として第一回苦情処理委員会の審議会に提出したが、委員会は「懲罰を取り消す根拠にはならない」として却下した。ハリスはあきらめずに闘いを続けている。

おそらく刑務職員たちからの仕返しがあるにもかかわらず、ハリスは手紙を書き続けて



いる。独房隔離生活の延長、懲罰用栄養補給パン、さらなる制限強化を覚悟で。ジョージ・フロイド殺害事件を契機に刑事司法制度の改革、警察と刑務所の廃止を求める大衆運動が高まっていることを感じ取り、それに励まされて、彼女は手紙を書き続けている。人種差別と国家暴力に世間が反対しているのを感じ取ったのだ。デモに参加することができないので、独房の中から手紙を書くという闘いを続ける決意なのだ。私への手紙という形で外の世界とつながることで、「出来れば女性にもう少し明るい未来が来る」ことを望んだ。「娘たちが、良い生き方を選択ができる状況がないために間違った生き方を選択して、ひどい懲罰を受ける」ことがなくなる世の中になるのを望んだ。私がセラのことを書き、彼女が祖母のことを書いた文通の後の手紙で、彼女は「闘いは続くぞ — クワネータ・ハリス」ときっぱりとし切迫した文字でサインした手紙を送ってきた。